

報告・資料

「きせきの子牛“元気くん”を活かした地域づくり研究会」に関する活動報告(第3報)
- 絵本化事業の概要について -

A Report on the Study Group for Local Area Design by means of The Amazing Calf 'Genky' (III)
: The Outline of The Project on The Genky's Picture Book Publication

福田 恵子

はじめに

平成10年10月一岡山県を襲った台風10号の災害事実を記録した絵本『きせきの子牛』が出版され(平成12年10月)、1年が経過した。この絵本は、津山市の平成12年度事業として実現したものであるが、その企画・推進の基盤は本研究会にあった。というのは、本研究会は、本来、「絵本化事業」を具現化することを発端として結成された組織であり、津山市はこの企画への協賛の求めに応じて研究会の構成団体となっていたからである。それゆえ、絵本の出版事業は、津山市と本研究会の連合事業として位置づけられるのが妥当であろう。

本報は、絵本化事業の企画から制作・出版・配本に至る過程の記録であり、これにより本事業の全容を掌握できるものと思う。絵本化事業は、半官半民的なボランティア活動組織である本研究会の最初の事業であるとともに、本研究会を支える柱となるべき重要な事業でもあった。さらには、地域住民の期待に応え得るだけのものを制作する重責を負った事業でもあった。

「絵本制作事業」が稼働するまでの諸課題

表1は、絵本制作事業が実質的に稼働し始めるまでの記録である。これらの検討・準備段階においてこなさなければならなかった課題は、次の3点に集約される。第1に、制作・出版に関する資金源の検討。第2に、

本研究会の組織づくりと発足。第3に、絵本制作事業の趣旨に賛同し、予算範囲内で出版業務可能な出版社の探索・折衝であった。前者2つの課題は、図1のように関連したものであり、その経緯の概要については、第1報¹⁾を参照されたい。ここでは、絵本化事業を遂行する上で浮上した諸問題について述べる。

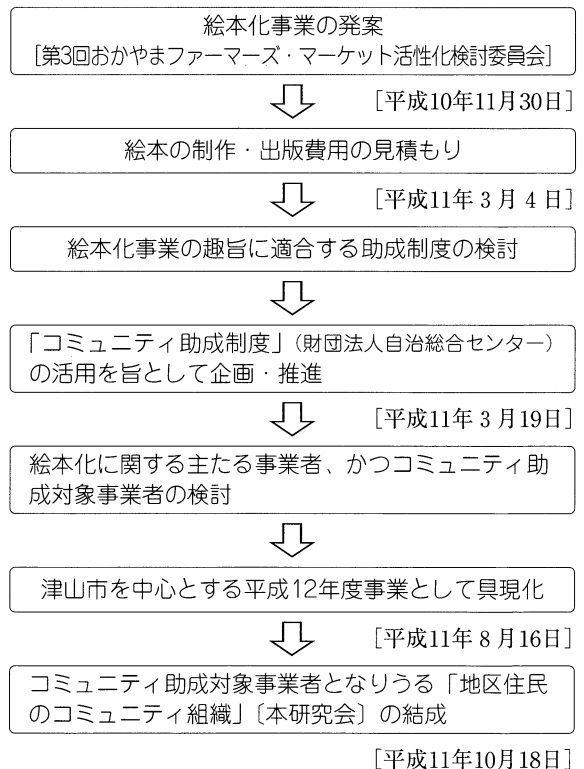


図1 絵本化事業の発案から本研究会結成までの経緯

表1 「絵本制作事業」が実質的に稼働するまでの経緯

日付	「絵本制作事業」の実質的稼働までの経緯 〔 具体的内容 〕	関係者等の記録					
		「元氣くんの会」構成団体			日本アニメーション株式会社	出版社	その他
		美作女子大	教育委員会	OFM財団			
8月20日	日本アニメ(株)へ資料送付 ・「きせきの子牛」に関する資料 ・「ごんご(河童)」に関する資料	福田助教授			佐野専務取締役		
9月2日	日本アニメ(株)より「仔牛の元氣くん」企画案(A・B案)提示	福田助教授			佐野専務取締役		
9月3日	日本アニメ(株)との折衝 〔絵本制作依頼の可能性確認〕	①絵本、アニメ化に関する現状報告 ・絵本制作費用(助成+津山市事業) ・研究会の発足について ②日本アニメーションの基本的意向 ③絵本制作に関する具体的折衝 ・ストーリー・絵の担当者について ・ストーリーへの地元支援について ・出版方法について	福田助教授		佐野専務取締役 佐藤取締役 楠葉監督		
10月14日	津山市関係者による日本アニメ(株)訪問		菊島教育次長 永禮課長		佐野専務取締役		
10月17日	日本アニメ(株)による絵本制作：現地取材①	西大寺〜(ボート)〜黄島 OFM ノースヴィレッジ	松岡教授 福田助教授	嶋川主任 石堂支配人 浅浦主事	楠葉監督	興農改企画課 千葉参事	
10月18日	絵本制作：現地取材② 「元氣くんの会」発足	石岡牧場から吉井川沿いに 西大寺方面へ南下	福田助教授 (※「発足会」への参加者については、「第1報」にて記載)		楠葉監督	石岡牧場社長 亀森獣医師	
10月27日	☆「平成12年度コミュニティ助成金申請書」提出			嶋川主任			
10月28日	絵本制作打合わせ会〔1〕		松岡教授 福田助教授	永禮課長 嶋川主任			
11月9日	「絵本制作スケジュール(案)」検討、作成 「絵本の配布先」検討		福田助教授	嶋川主任			
11月12日	出版社=(株)借成社との折衝〔結果：可能性大〕 日本アニメ(株)へ「絵本制作スケジュール(案)」提出		福田助教授		佐野専務取締役 佐藤取締役 楠葉監督	〔株〕借成社 中島氏	
11月14日	第20回記念 神奈川県手づくり紙芝居コンクール：最優秀賞受賞					(※ 参加・応援関係者については、「第2報」にて記載)	
11月15日	絵本制作打合わせ会〔2〕	・(株)借成社との折衝報告 ・紙芝居受賞報告	福田助教授	永禮課長 嶋川主任			
11月末	☆「津山市 平成12年度当初予算要求」			嶋川主任			
12月3日	(株)借成社での「出版企画会議不通過」連絡〔借成社断念〕		福田助教授			〔株〕借成社 中島氏	
12月8日	(株)ベネッセコーポレーションでの出版折衝→不可		目瀬学長			〔株〕ベネッセ Co	
12月13日	(株)ぎょうせい、(株)建設総合資料社との出版折衝					野平 OFM 前理事長	
12月14日	(株)ぎょうせい、(株)建設総合資料社へ絵本制作資料送付		福田助教授				
12月15日 ～16日	日本アニメ(株)による出版社2社一(株)ぎょうせい、(株)建設総合資料社一との折衝				佐野専務取締役	〔株〕ぎょうせい 〔株〕建設総合資料社	
12月24日	絵本制作打合わせ会〔3〕	・コミュニティ助成申請不受理につき、助成金一時断念。再検討。	福田助教授	永禮課長 嶋川主任	寺内事務局長 石堂支配人		
1月5日	(株)ぎょうせい絵本出版業務受諾〔企画会議通過〕					〔株〕ぎょうせい	
1月12日	☆「平成12年度コミュニティ助成金申請書」再提出			嶋川主任			
1月31日	☆「平成12年度コミュニティ助成金申請書」内定通知						
2月中旬	☆「津山市 平成12年度当初予算内示」						
2月28日	絵本制作打合わせ会〔4〕 絵本制作関連各者顔合わせ 及び編集会議	・委託制作費用の確認 ・絵本「きせきの子牛」原案 ・ページ数及び型版の検討 ・著作権及び版権問題 ・出版冊数の検討	福田助教授	永禮課長 嶋川主任	寺内事務局長 石堂支配人	佐野専務取締役 佐藤取締役 楠葉監督	〔株〕ぎょうせい 梶原課長 谷下係長 野平 OFM 前理事長
4月19日	☆「平成12年度コミュニティ助成金」決定通知						
5月9日	☆(株)ぎょうせいと津山市：「絵本制作業務委託契約」締結 保証人契約(株)建設総合資料社			嶋川係長 定久主事		〔株〕ぎょうせい 〔株〕建設総合資料社	

* 略記：日本アニメ(株)=日本アニメーション株式会社、OFM財団=おかやまファーマーズ・マーケット管理運営財団

1. 資金源の検討と組織づくり

津山市の平成12年度事業としての予算的支援

300万円と見込まれた絵本化事業の資金基盤は、①市町レベルの公共団体の支援と、②助成制度—宝くじ受託事業収入を財源とした、財団法人自治総合センターによるコミュニティ助成制度—の活用という2つの柱で推進していく方針を定めた。

前者に関しては、津山市教育委員会の賛同と津山市議会への提案・同意が得られたことで具体的に動き始めた〔平成11年8月〕。その背景には、絵本化のもつ意義—平成10年の台風10号災害が、ここ津山周辺地域においては昭和20年の枕崎台風以来の大災害であり、子牛の生還実話は、その被災事実を後世へ語り継ぐ一つの手段であること。老若男女を問わず話題を呼んだ感動的な出来事であり、災害復興に取り組む人々の大きな励みとなったこと。そして、今日、教育界においては「幼児期からの心の教育」やたくましく「生きる力」の育成²⁾などがクローズアップされており、実話の絵本化は、地域の子どもたちに格好の教材を提供することになること—が、好ましく普遍的な価値を有しており、かつ時代を反映していたことにある。

津山市における平成12年度事業として公的に予算要求がなされたのは、平成11年11月のことである。要求額は、コミュニティ助成（100万円）を見込んだ差額：250万円（制作・出版経費200万円+実務上の諸経費50万円）であったが、幸い、本学制作の紙芝居『きせきの子牛』が「第20回記念神奈川県手づくり紙芝居コンクール」で最優秀賞を受賞し、反響を呼んでいたさなかのことであった。

コミュニティ助成の一時断念と再検討

上記の予算要求と並行して、コミュニティ助成を受けるべく、その対象団体³⁾—地区住民を主体としたコミュニティ団体—となり得よう本研究会の組織づくりが行われた。つまり当初の計画としては、絵本化の主たる事業者はコミュニティ団体である本研究会とし、津山市からは、構成団体である津山市教育委員会の一事業として支援を仰ぐというものであった。

それゆえ、コミュニティ助成申請においても、本研

究会を「実施団体」として申請を行った〔研究会発足直後：平成11年10月27日〕。ところが、申請の結果は“不受理”〔同年12月下旬〕であり、その理由として、以下の2点が指摘された。

第1に、助成対象の「地区住民のコミュニティ組織」に本研究会は該当しないということである。地方振興局2局、勝央町、津山市教育委員会、おかやまファーマーズ・マーケット（以下、OFMと略記する）管理運営財団、美作女子大学といった構成組織は公共性の強い団体であり、ボランティア的に運営されているとはいえ、純然たる地区住民のコミュニティ団体として見なすことはできないということであった。

第2に、助成基準を十分に満たしていないと判断された。コミュニティ助成の「青少年健全育成助成事業」分野における助成基準は、次の3点があげられている。

- ① 宝くじの普及広報の効果が発揮できるものであること。
- ② コミュニティ活動に関するイベント等ソフト事業で国等の補助金の交付を受けないものであること。
- ③ 市町村又は地区住民のコミュニティ組織が主体となっており、主として小中学生が参加するイベント等ソフト事業とする。

つまり、助成を得るためには、絵本の制作のみならず、それが宝くじの普及広報等につながるよう、子どもたちの参加するイベントを企画することが重要な要件として組み込まれているのである。そこで、「絵本の制作と読書感想文コンクールの実施」を事業として申請したわけであるが、派手さのない静的な「読書感想文コンクール」は、“普及広報のための効果的なイベント”とは見なされなかったようであった。

このような経緯から、平成11年12月には助成金を断念せざるを得ない事態が一時発生した。後述するが、これと時期を同じくして、ほぼ確定的であった出版社がリスク回避のため離れるなど、絵本化事業は大変な暗礁に乗り上げた。

資金面に関しては、OFM管理運営財団が助成金を補填することも思案されたが、最終的には、再申請する方向で奮起することになった。すなわち、指摘さ

れた2つの要件を充たす方途を探る努力がなされたのである。助成対象事業者は「本研究会」ではなく「津山市」に変更し、子ども参加のイベントに関しては、従来津山市が行っている「津山市子どもまつり」において、紙芝居『きせきの子牛』の上演などを通して広報に努めるといった形で事業内容の見直しを図った。その結果、申請は受理され助成を得ることが可能となったのである〔内定：平成12年1月31日、決定：平成12年4月19日〕。

これにより、絵本化事業は名実ともに津山市の平成12年度事業に組み込まれ、本研究会の役割は、その実行委員会的な位置づけとなったが、当時、『きせきの子牛』の絵本化を夢見た者たちにとっては、形式よりも、より高いレベル（地方の絵本でありながら、全国に頒布される一般絵本の出版形態をとること）で目的を遂行させること、長く愛され語り継がれる質の良いものをつくり上げること、何よりもそれらが重要であった。

2. 請負出版社の探索・折衝

出版形態：「一般市販」を目指して

一般に出版される本は、「出版社企画」によるものと外部からの「持ち込み企画」によるものに2大別される。本件が該当する「持ち込み企画」の場合は、自費出版の形態をとることが大半であり、一般市販の形態をとることは極めて少ない。いうまでもなく、一般性に欠けていたり、質的にもある程度の知名度のある作家でなければ出版社側の採算ベースに乗らないからである。しかし、視点を変えれば、“一般的で優れた素材”であり、“著名な作家の携わった企画”であるならば、一般市販形態の可能性もあるわけである。

絵本化を企画した当初から、目標は「一般市販」絵本の出版であり、自費出版はやむを得ない場合の最後の手段とした。なぜならば、公的な団体が本を自費出版して配布するケースはよく見受けられる—というよりもむしろ通常のケースである—が、そこに内在する問題点は、「企画」→「制作・出版」→「限られた地域や分野内への配布」でその事業が終結してしまう点

にある。そうすると、その出版物の価値や評価、そして波及効果を見定めることのない自己満足的で短命なものに止まってしまう懸念をぬぐいきれないからである。もちろん、年度ごとに予算づけがなされ事業が推進される公的な団体において、長期的な展望をもった企画が立てにくいのも当然なことなのであるが、この絵本化事業は、“元氣くん”を核とした本研究会の今後の活動を支える柱となるべきものであることを考えると、「一般市販」は、最大限の努力をもって達成したい目標だったのである。

日本アニメーション株式会社の支援と制作

『きせきの子牛』の一般市販の可能性を検討したとき、確かに地域色の濃い素材ではあるが、台風災害の話として一般化することは可能であるし、この実話が人々の心に語りかけるものの熱さは、紙芝居上演においても実感していた。“素材のよさ”は十分にあると思われた。それゆえ、大きなハードルは“著名な作家”の参与であった。

その可能性を探る中、前OFM管理運営財団理事長（前岡山県副知事）である野平匡邦氏より朗報が寄せられた〔平成11年8月〕。『きせきの子牛』のアニメーション化の可能性を打診するため会談した日本アニメーション(株)⁴⁾の佐野浩平氏（専務取締役）より、アニメーション制作を見越した上で絵本づくりに携わってもよいとの回答を得たというのである。それは、紙芝居『きせきの子牛』を手にした楠葉宏三氏（アニメーション制作監督：写真2）の強い後押しによるものであったようである。それには、次のような心情的な背景がうかがえた。今日子どもたちは、ストーリー展開のはやい、軽いタッチのギャグアニメーションを好む傾向にあり、元来、感動の名作を長年にわたって制作し続けてきた現場スタッフにとっては、「つくりたいもの」と「つくらなければならないもの」—“夢”と“視聴率を重視した現実”—との狭間で、常に感動的な名作を手がけることを渴望しているという。それは、楠葉氏自身の願いでもあったように感じられた。「子牛の生還実話そのものも感動的であるが、その紙芝居は素朴で心温まるものがある。そしてそれに懸命

に取り組む学生たちの情熱に魅せられ、かつまた絵本やアニメに、と夢を馳せる人々の姿に心をゆさぶられた」—これは楠葉氏の言葉である。楠葉氏は、本研究会の発足会議へも、また横浜で開催された「第20回記念神奈川県手づくり紙芝居コンクール」〔平成11年11月14日〕にも駆けつけてくださった。その“共に感動的な名作絵本を作ろう”という人情味あふれる熱意は、私たちに何よりも大きな力を与えてくれた。

利益の追求は望めないことを承知の上、「感動的な名作を提供し続けてきたアニメーション会社としての企業努力として、ただし将来的にアニメーション制作に向けての地域努力を行うこと」という条件のもと、日本アニメーション(株)が絵本化を支援し、その制作を引き受けてくれることになった。これにより、自信をもって「一般市販」絵本として出版社への企画売り込みができる条件が整ったのである。

二転三転した出版社との折衝

最初に折衝した出版社は(株)偕成社であったが、この出版社は、日本アニメーション(株)側から提案されたものであった。全国へ販売ルートをもつ大手出版社を目標としていた私たちにとって、願ってもいない会社であった。(株)偕成社=中島玄氏、日本アニメーション(株)=佐野浩平氏・佐藤昭司氏(専務兼企画部長)・楠葉宏三氏、本研究会=筆者の3者間で折衝が行われた〔平成11年11月12日〕。絵本化の趣旨説明や資金的な条件をつきあわせた上で、2社間のこれまでの関係もふまえて確かな手応えを得た。そして、2日後に控えた紙芝居コンクールでの受賞が、出版業務の請負を決定的なものとする切り札となるはずであった。ところが、最優秀賞受賞にもかかわらず、「偕成社内での企画会議においては、一般市販でのリスクは負いかねるという結論に至った」という通知が届いたのである〔平成11年12月3日〕。出版社側の懸念は、①地域色が濃いことから一般向きでない、②まだ制作されていない段階であり不安要素が大きいということであった。つまり、このようなリスクの高い冒険的な企画は、不景気の時代にあっては回避するのが妥当という判断が下されたようであった。

日本アニメーション(株)も本研究会も全く予期せぬ結果であり、大きく動揺した。助成金申請の不受理問題も浮上し、絵本化を断念することも選択肢に入れざるを得ない事態でもあったが、日本アニメーション(株)側から絵本制作を続行する意向が示され⁵⁾、その安堵感に支えられて、私たちは助成金の再申請と新たな出版社探しに専念することができたように思う。

しかし、出版社探しは難航した。目瀬守男学長(本研究会会長)によって(株)ベネッセコーポレーションに打診がなされたが、やはり不景気の折りから出版部門を縮小しており、出版は不可能ということであった〔平成11年12月8日〕。日本アニメーション(株)自体に、制作から出版までのすべての業務を委託可能であるか否か、それに加えて、(株)偕成社に続く関連会社等への打診も依頼した。

このような出版社探しと同時に、本事業は、津山市の平成12年度予算によるものであることから、出版社と津山市との随意契約問題や業者指定登録問題も合わせて考慮しなければならない問題が発生した。そのような折、野平氏より(株)ぎょうせいと(株)建設総合資料社の可能性が示唆された。(株)ぎょうせいは、地方自治体と濃いルートのある出版社であり、津山市とは登録済みの業者でもある。また、(株)建設総合資料社は、建設省(国土交通省)と関連のある出版社であり、絵本が台風災害によるものであることから興味を示したということであった〔平成11年12月13日〕。早速、2社に資料—紙芝居・研究会の発足資料・関連新聞記事などを送付するとともに、各出版社との折衝が野平氏と日本アニメーション(株)を中心として行われた〔平成11年12月14～16日〕。両社とも出版への意欲を示したが、津山市としては業者指定登録を12月中に行わなければならない緊迫した状況もあり、登録済みの(株)ぎょうせいを第一候補とした。その後、平成12年1月5日、(株)ぎょうせい社内で本企画が採択されたことにより、絵本化事業の基盤ができあがった。(株)ぎょうせいと津山市との正式な業務委託契約は平成12年5月9日に締結され、その際、(株)建設総合資料社はその保証会社として契約がなされた。

絵本の形態・構成と制作過程

絵本の制作・出版が事業として実質的に稼働を始めたのは、平成12年2月28日のことである（表1）。この日、絵本化に向けて準備を重ねてきたスタッフが、(株)ぎょうせい本社に一堂に会し、編集会議が行われた。

日本アニメーション(株)より絵本の原案が提出されるとともに、①出版冊数および委託制作経費の確認、②著作権および版権の所在確認、③一般市販について：津山市の事業としての無料配布分と一般市販分の刷りわけ確認、④絵本の型版およびページ数の検討、⑤ストーリーに関する地元意見の集約等について協議がなされた。表2を参照されたい。津山市は、平成12年度事業として(株)ぎょうせいへ絵本制作を委託し、(株)ぎょうせいは自費出版形態にて2,000冊の制作と印刷を請け負う。絵と文については、(株)ぎょうせいから日本アニメーション(株)へ依頼する構図である。その際、著作権・版権をそれぞれ日本アニメーション(株)・(株)ぎょうせいへ留保する形で、かねてからの希望であった一般市販を実現させることとし、OFM

表2 絵本事業の概要と絵本の体裁

	津山市平成12年度事業分	一般市販事業分
企画・出版形式	持ち込み企画・自費出版	ぎょうせい企画
出版経費	300万円（制作・印刷）	ぎょうせい負担
出版冊数	2,000冊 初版4,000冊内に含まれる	初版4,000冊 OFM財団：著者価格にて1,000冊買い取り
配本形態	市内の保育園・幼稚園・小学校・図書館・公民館等へ配布	販売員により全国販売 但し、店頭販売はしない
著作権	日本アニメーション(株)	
版権	(株)ぎょうせい	
型版・ページ数	A4変形版、32ページ	
つきもの	カバー折返1	津山市長：挨拶文
	裏見返し	「子牛の元気君」歌と楽譜：中林淳真作詞・作曲
	カバー折返2	元気くん漂流ルート・元気くんの写真
奥付	発行：津山市教育委員会 絵と文：日本アニメーション 制作：ぎょうせい	著作：日本アニメーション 協力：津山市教育委員会 発行：ぎょうせい

注) ストーリーに関しては、地元の意見を反映させる

管理運営財団が著者価格にて1,000冊を買い取ることで(株)ぎょうせいの一般市販リスクを軽減する仕組みである。

以後、絵本制作は、資料1のように比較的早いペースで進行していくことになるが、“地域住民の熱意でつくり上げた津山の絵本”となるためにも、地元の意見が反映されるよう、特にストーリーや文字の検討に関しては、本研究会の意向が極力取り入れられたのである。

絵本『きせきの子牛』のストーリー構成と変遷

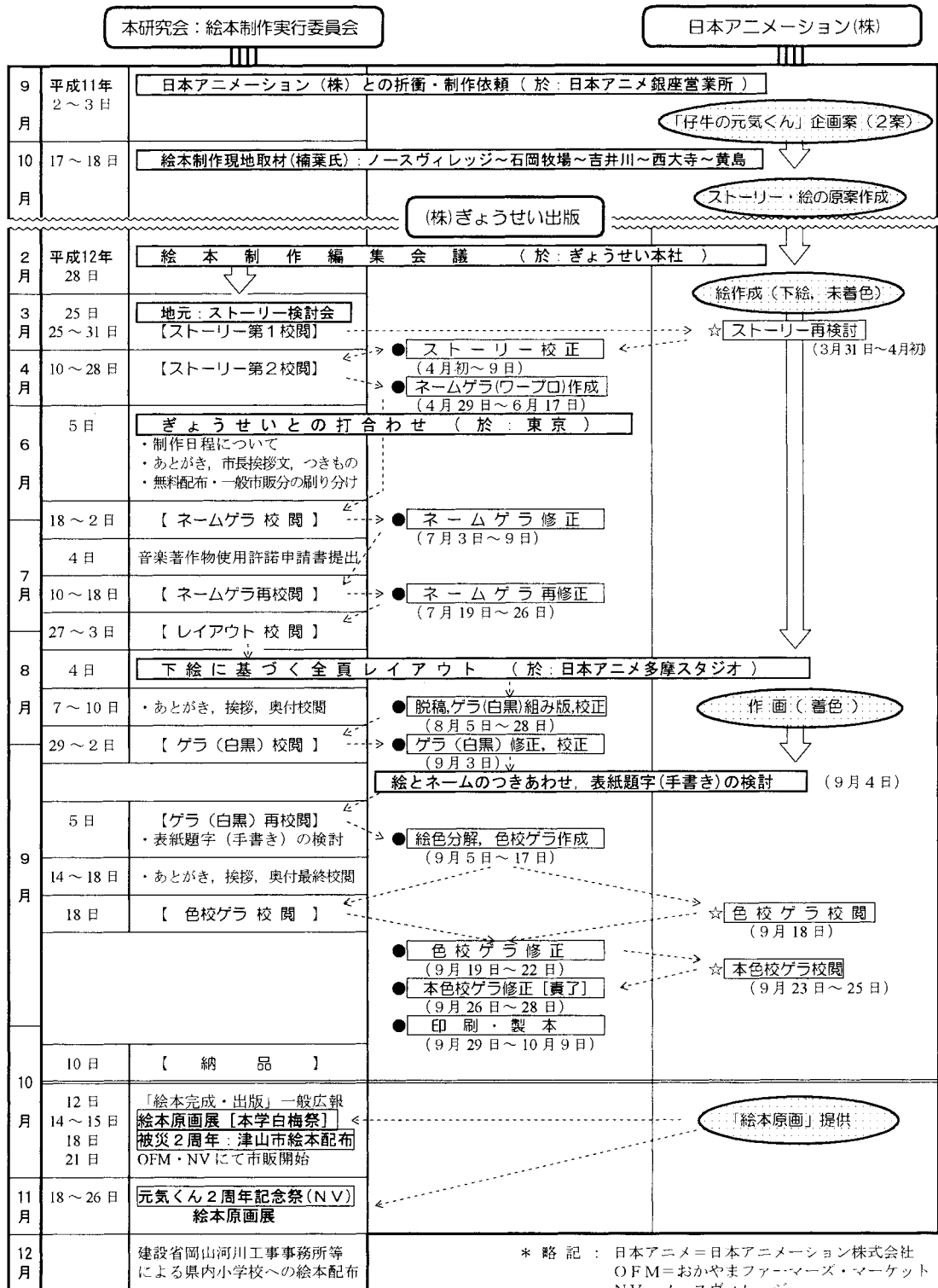
1. アニメーション企画案〔平成11年9月2日〕

日本アニメーション(株)から最初に提案されたストーリー案は、アニメーション制作も見越したもので、A・B2案が示された。「A案」は一般的な作品で、主人公の子牛と動物たちや牧場の少年との交流を描きながら、嵐の夜の冒険と試練を感動的に描いたもの。「B案」は、津山を代表するキャラクターでもあるゴンゴ(河童)の子どもを登場させた民話的な素朴な味わいを生かしたものであった。ストーリー展開については、資料2に示す各案の「登場キャラクター紹介」で、その概要が把握いただけるものと思う。これらに共通した企画意図は、「子ども達に命の尊さや生きることの喜びを頭ごなしにではなく、わかりやすく楽しい、そして感動的な物語を通して訴えていく」ということであった。

2. 絵本制作に向けての原案〔平成12年2月28日〕

絵本制作を目的として本格的に提案されたストーリー構成は、先のA・B案とは全く異なるもので、紙芝居『きせきの子牛』をモチーフにしたものであった⁶⁾。紙芝居と大きく異なっている点は、次の2点であろう。一つは、人間との心の交流は描かず、あくまで「子牛」を主人公に「雄牛」・「雌牛」との関係性の中でストーリーを展開している点。もう一つは、この物語には、二つのクライマックス場面①雌牛の水没場面、②激流を流される子牛と雄牛が橋に激突して離ればなれに

資料1 絵本『きせきの子牛』の制作・出版・広報・配本過程



* 略記：日本アニメ＝日本アニメーション株式会社
OFM＝おかやまファーマーズ・マーケット
NV＝ノースヴィレッジ

資料2 アニメーション企画案〔平成11年9月2日〕

A 案	B 案
<p>●子牛【のちに元気君と名づけられる】 牧場に住むかわいい子牛。同じ頃に生まれた子牛たちに比べて体が小さくおとなしいので、いつも遊びの輪に入りそこねてしまう。引っ込み思案で臆病だが心はやさしい。</p> <p>●ユウスケ（裕輔）十歳 牧場をいとなむ両親と暮らす明るく元気な男の子。動物が大好き。か弱い子牛の世話をお父さんからまかされ、一生懸命かわいがらる。</p> <p>●バッタの長老 牧場の草むらに住む虫たちの長老。物知りで何でもよく知っている。子牛にいろいろなことを教えてくれる。草の先に止まっていた長老が、牛の鼻息に飛ばされ、踏まれそうになったのを子牛が助けたことからよい友だちになる。気弱な子牛をいつも励ましてくれるが、少々、いばり屋で物事をオーバーに表現するくせがある。</p> <p>●雄牛のウィリー 牧場の牛たちのリーダー。いつもは寡黙だが、いざという時に頼りになる。小さな子牛のことを陰ながら励ましてくれる。台風の日、吉井川に流された子牛を最後までかばってくれる。</p> <p>●雌牛 牧場の子牛たちをやさしく見守っている。</p>	<p>◇子牛【のちに元気君と名づけられる】 牧場に住むかわいい子牛。同じ頃に生まれた子牛たちに比べて体が小さくおとなしいので、いつも遊びの輪に入りそこねてしまう。引っ込み思案で臆病だが心はやさしい。牧場の近くの森に住む小鳥や草原の虫たちの話を聞くのが大好き。吉井川に住む河童のゴンゴと友だちになる。台風で川に流されるが、その体験をおして大きく成長する。黒い大きな瞳がかわいい。</p> <p>◇ゴンゴ 吉井川に住む河童の子ども。好奇心旺盛で人の住む世界にやって来る。仲間はずれにされ、吉井川の水辺で泣いていた子牛と出会って友だちになる。牧場しか知らない子牛に広い世界の話をしてくれる。</p> <p>◇雌牛や雄牛たち 牧場の子牛たちをやさしく、ある時はきびしく見守っている。元気君のことをやさしく励ましてくれる。</p>
<p style="text-align: center;">●◇犬のロッキー 牧場の番犬。利口で頼りになる親分肌。気の弱い子牛に牧場のことを教えてくれる。</p> <p style="text-align: center;">●◇ニワトリたち にぎやかでおしゃべりな一団。群れのリーダーの雄鶏トッキーは、子牛を脅かすのを楽しみにしている。めっぽう気が強くいたずらだが、悪気はない。</p> <p style="text-align: center;">●◇子牛たち 小さな子牛と同じ頃に生まれた仲間たち。牧場を駆け回り、餌をよく食べる。一番小さな子牛（元気君）のことをからかったり、仲間はずれにすることもあがるが、根は善良である。</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; width: 100px; height: 100px; margin: 10px auto; display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> <p>共通の登場動物</p> </div>	

なる場面一が盛り込まれているが、後者の部分がより劇的に脚色され、互いに思いやる愛情の深さとやるせない極限状況が深い感動を持って描かれている点である。資料3-I及び3-IIは、紙芝居・絵本原案・完成絵本の当該場面を比較したものである。

絵本のストーリー構成は、後述する地元の「ストーリー検討会」の意向を踏まえて再構成され〔平成12年4月〕、文章の加筆・訂正、文字の字体や大きさ等の検討および校正全般は、筆者がその任にあたった。

3. よりよい絵本に「ストーリー検討会」

〔平成12年3月25日〕

「ストーリー検討会」は、上記の原案に対し、地元の意見を集約する目的で開催した会議である。意見提供者を表3に示す。本研究会のスタッフに加え、子どもの教育や文化活動への従事者、国語・児童文学研究者等に参加いただき、多面的に評価・検討を行った（写真1）。植本氏による原案の読み聞かせの後、協議に入った。

そこで取りまとめられた提案事項と、完成した絵本の内容を対比させてみる。

表3 「ストーリー検討会」への意見提供者

所属機関等	氏名（職名等）
津山市教育委員会	二木 和男（社会教育課係長） 峪川 伸嗣（社会教育課主任）
美作女子大学	船盛 茂（教授） 横川寿美子（教授／児童文学） 松野 脩輔（教授／国語教育） 松岡 信義（教授／美作創作の会） 福田 恵子（助教授／紙芝居制作） 横川 知之（講師／国語教育） 白井 敬子（家政学部学生／4年） 石田 香織（家政学部学生／1年）
OFM管理運営財団	寺内 侃一（事務局長） 石堂 寿隆（ノースヴェレッジ支配人）
津山文化振興財団	小林 孝
本学附属幼稚園	園田 稔（園長）
市立成名幼稚園	岩野 聖子（教諭）
市立高野小学校	神崎 博彦（校長／美作創作の会）
市立鶴山小学校	山下 悦良（校長／国語教育）
町立湯原小学校	中島 ゆみ（講師／紙芝居絵指導）
人形劇グループ：「空とぶにんじん」	芦田はるみ・吉田志津子
読み聞かせグループ：「たんぼの家」	国米 敬子・植本 真弓
(有)石岡牧場	石岡 基
岡山南部家畜診療所	亀森 泰之（獣医師／元気君救助）
ギタリスト	中林 淳真（歌：「子牛の元気君」）

場面Ⅰ：台風襲来・雌牛の水没		
	<p>めうし 「モオ！ だれか…だれか助けて！ つっ綱を ほどいてちょうだい！」 めうしの声です！</p> <p>吉井川からあふれだした水は、もうめうしの首のあたりまでできています。めうしは、つなかれたままだったのです！</p> <p>子牛 「ああ！ めうしさん！ めうしさん！ だれかあ、石岡のおじさん！ めうしさんが！ めうしさんがおほれちやうよお！」 「モオー！…モオー！…モオー…モオ…」</p>	<p>子牛 おうし</p> <p>「ああー……………」 「ちっ、ちきしよお！」 「うわあ〜！ めうしさん！ めうしさん！ めうしさんが 死んじゃうよお。めうしさん〜ん！ めうしさん！ めうしさん〜ん！ めうしさん……………」</p> <p>とうとう まっ黒な水は、めうしをのみこんでしまいました。ぼろんぼろん目から 大きな涙が ぼろんぼろんと ころり落ちてきました。まっ黒な水は、その涙をのみこんでしまいました。</p>
	<p>「だれか、 たすけて… たすけて… ちょうだい…」</p> <p>くるしそうな 声に めうしさん です。ふりかえると めうしさんは ひもで つながれて いたのです。おうしさんが たすけようとしたが ひもは ほどけません。</p>	<p>「めうしさん、 めうしさん！」</p> <p>こうの 目から おおつぶの なみだが ぼろん ぼろん と ながれました。</p> <p>水は どんどん やってきて とうとう めうしさんを のみこんでしまいました。</p>
	<p>「だれか…たすけて！ つっ綱を… つなを ほどいて ちょうだい……」</p> <p>母さん牛です！</p> <p>母さん牛は つながれて いたのです。</p> <p>「ああ！ なんて ことだ！ 父さん牛は すぐさま つなにも かみつきました。 けれども かたかたも 切れません。</p>	<p>「かあさん！ かあさん！ かあさんーん！」 子牛が さげんでも さげんでも 水は どんどん 母さん牛を のみこんで いきます。</p> <p>「かあさん！ かあさん…… かあさん……」</p> <p>まっくろい 水は 母さん牛を のみこんで しまいました。</p> <p>〔完成絵本p. 14～15〕</p>

場面II：激流の中での雄牛との別れ		
	<p>子牛 おうし</p> <p>「おおうしさん！何かくる！」 「なにいいい！」 《ドッシーン！》 「うわあああああああ！」 橋です！ 子牛もおうしもいやというほど たたきつけられました。 ふわっと からのたがういたかと思うと、 また まっ黒な水の中へ ザッハーンと もどされました。</p>	
<p>子牛</p> <p>子牛の落ちたところへ、大きな木もザッハーンと落ちてきました。ぶるぶるとふるえながら 子牛は 木にしがみつきました。 おうしの姿が 見えません！ 「おおうしさん！おおうしさん！ おおうしさん！…」 子牛は、ずっと おうしを よびつづけました。 けれども、二度と おうしの返事は かえってきませんでした。</p>	<p>子牛</p> <p>「おおうしさん！おおうしさん！ おおうしさん！…」 子牛は、ずっと おうしを よびつづけました。 けれども、二度と おうしの返事は かえってきませんでした。</p>	
	<p>おおうしさんのおかげで こうしは けがを しませんでしたが、 おおうしさんは つのが はさまって うごけなくなりました。</p> <p>おおうしさんのおかげで こうしは けがを しませんでしたが、 おおうしさんは つのが はさまって うごけなくなりました。</p>	<p>むこうから おおきな 木が ながれてきます。 「にげろ、 ぼうず！」 「おおうしさん、 おおうしさん！」 「はやく にげるんだ！」 おおうしさんは ちからを ぶるって こうしを どんと つきとばしました。</p>
	<p>橋です！ 「あぶない！」 父さん牛は 子牛を うしろへ おしやりました。 どっしーん！ ふたりは 橋に たたきつけられました。 父さん牛の ようすが へんです！ 角が 橋の らんかんにはさまって うごく ことが できません！ 「とうさん！とうさん！」 子牛が 引いても おしても 角は はずれません。</p>	<p>そのとき—— 木が 大きな 木が けが 子牛たちを めがけて ながれて きました。 「にげろっ！ ぼうず！」 「とうさん……」 「にげるんだ！ しんばいするな。 父さん牛も かならず おいつくから！」 父さん牛は 力を 振りしほって 子牛を どん! と つきとばしました。</p>
紙芝居	絵本原案	完成絵本

〔完成絵本p. 20～21〕

(1) “子どものための物語”として踏襲すべき形態

【提案事項】：台風災害の事実とそれを通して子牛が成長したことの事実、命の尊さを実感し感動できる事実—“心に残る話”として最もオーソドックスかつ良き素材としての条件を具備しているが、次の形態を踏襲しなければ、子どもにとっては消化不良で終わってしまい感動がうすれる。

- ①「物語の始まる場所」と「終結する場所」が同じであること。
- ②解説調で結論をおしつけるような終結は避け、子どもたちがそれぞれの心の中に描いている思いを大切にすること。

【補足】：これらは、原案が「牧場の場面」から始まり「島で助けられる場面」で終結していた点、そして次のような文章でまとめられていたことへの指摘である。

こうしは	「なんて うんの いい こうしだろう！」
しまに みまわりにきた	みんなは こうしの ことを
どうぶつのおいしゃさんに	きせきの こうし
たすけられました。	と よびました。

【完成絵本】：救助後の子牛の様子については、言葉で表現することを避け、絵本の最終ページに描かれた“牧場で仲間たちと元気に遊ぶ子牛の姿（遠くには草を食んでいる成牛たちの姿も見える）”によって、子どもの想像力で物語を終結させる工夫がなされた。

(2) “雄牛、雌牛”を“父さん牛、母さん牛”に

【提案事項】：雄牛と雌牛の存在は、誰もが無意識のうちに父親・母親的な存在としてとらえている。それゆえ、事実とは異なるが、意識の混同を避けるためにも“父さん牛、母さん牛”と表現する。しかしながら、両牛ともに子牛の目の前で死んでしまうことは非常に残酷であり、幼い子どもに計り知れない不安感を与えてしまうことは憂慮すべき課題である。したがって、“父さん牛”との別れについては、その死は曖昧

に表現し、再会できる希望のもてる展開とする。

【完成絵本】：“父さん牛との別れ”の場面は、資料3-IIを参照されたい。一激流の中、まさに大木が2頭に激突しようとする危機迫った折り、父さん牛は「にげるんだ！ しんばいするな。父さんも かならず おいつくから！」⁷⁾とあって、子牛をかばってドンと突きとばす。その後、父さん牛のその言葉が子牛の心の支えとなるのである。絵本からその一部を引用する⁸⁾。

子牛は こわくて こわくて
 たまりませんでした、父さん牛の ことばを
 なんども なんども つぶやきました。
 「とうさんも かならず おいつくから…」
 「…… かならず おいつくから ……」

(3) 地名の取り上げ方について

【提案事項】：絵本の内容は、“郷土色豊かなもの”、“事実に基づいているが創作色の濃い一般的なもの”といった二つの立場が考えられるが、この絵本に関しては郷土色を出し、「津山」「吉井川」「瀬戸内海」程度の地名を登場させる。その理由としては、①“本当にその場所がある”という驚きと現実味に加えて親近感をもたせることができること。②地理的な視点から物語を検証でき、それが子どもの興味や関心にもつながること。③“読み聞かせ”においても、読み手（家族・教師など）と子ども間の対話が広がる、という意図に基づくものである。

【完成絵本】：一般市販を考慮し、郷土色が濃くなりすぎないように、この絵本のキーワードとなる「吉井川」「瀬戸内海」の地名が盛り込まれている。

(4) 「あとがき」について

【提案事項】：絵本化事業の趣旨からしても、「あとがき」は制作会社によるものではなく、①台風10号災害の概要や②子牛の生還実話の説明、③絵本ができるまでの経緯説明等を盛り込んだものである方が望ましい。特に、読み聞かせをする大人にとっては、読後感に重みが増し、充実したものとなる。

【完成絵本】：上記の意向により、「あとがき」は筆者が担当し、「津山市事業（配布）分」・「一般市販分」に分けて執筆した。前者については、台風災害を記録として残す意義を勘案し、①台風災害の概要記述に重点をおいた。後者については、②および③—つまり、子牛の生還実話とこの絵本ができるに至った過程の解説に重きをおいた。

(5) その他、全体の文章表現などについて

【提案事項】：①絵本の原案には、体言止め（例：「いつも いちばんさいご。」「ほくって だめな子？」）がいくつか見受けられるが、読み聞かせをする上では読みにくい表現の一つである。②子どもたちが再び手にとって読もうと思う本は、日本語としての文体が整った美しい文章表現の本である。これは、時代を越えて長く読み継がれている本の基本的な条件だと思われる（現代風の言葉や表現は避ける）。

【完成絵本】：この絵本は、幼児～小学校中学年程度を対象としているが、この時期の子どもたちにとっては、自分で読むこと以上に、身近な“大切な他者”（家族や教師など）から“読み聞かせ”してもらうことに重要な価値を有している。つまり、子どもは、読み手である大人の声色や表情を通して感情の読みとりや自分の感情の確認を行っており⁹⁾、また、他者の心に寄り添うことのできる共感性を無意識のうちに身につけているのである¹⁰⁾。このことを考慮して、上記の指摘に基づいて文章を書き直すとともに、大人でも読みやすいように小学校2年生に準拠した漢字を当用し、それらにはすべてルビをふった。

絵本『きせきの子牛』の文字と絵について

1. 文字の工夫

様々な絵本の文字の扱い方を比較・検討し、この絵本に関しては、次のような工夫を施した。

- ◇ 全般的な字体：丸ゴシック体
- ◇ 擬声・擬態語：明朝体
- ◇ 子牛の心の中の言葉：明朝体の斜体文字

- ◇ 文字サイズ等：声・擬声語等の音の大きさを視覚的に工夫する。
- ◇ 文章は、「分かち書き」にする。

「全般的な字体」を丸ゴシック体としたのは、読みやすく優しい雰囲気をもっており、過酷なストーリー展開ゆえに、敢えてやわらかな印象を与えて心的なゆとりを確保することをねらったものである。また、絵柄と文字が重なる部分が多いため、細線の明朝体では文字が読みづらくなることへの配慮もあった。

「擬声・擬態語」は、通常の文字サイズより大きいサイズを用いて区別した。それゆえ、明朝体の細線の読みづらさも克服されている。

「子牛の心の中の言葉」は、明朝体の斜体文字にするとかなり弱々しい雰囲気となるが、かえって、他の文字と明確に区別できる点や子牛の不安な心情も反映しているようで、意外な効果があったように思う。

「文字のサイズ等」は、下記¹¹⁾のように煩わしくない程度に、また絵と競合しないよう、会話や擬声語の音の大きさにあわせて変化させ、視覚的に強弱を表現することを試みた。

びゅう～ びゅうー！
がたん！ がた がたっ！！
ざっ ざざあ～！
ごご… ごごー ごっごごおー！

「分かち書き」に関しては、この絵本が小学校での道徳や国語科の教材として用いられることも想定し、神崎博彦氏（高野小学校長）と下山悦良氏（鶴山小学校長）の指導のもと、完成させた。

2. 絵について一和紙に描かれた原画

未公開絵画とラフスケッチ 絵本の絵柄は、北原健雄氏¹²⁾（写真2）によるものである。絵本の原画は、最終的には「和紙に日本画用絵の具で彩色されたもの」となったが、それに至るまでには、様々な画材で数多くのサンプル画が描かれている。ここでは、いくつか



写真1 ストーリー検討会
〔平成12年3月25日：美作女子大学にて〕



写真2 下絵に基づくレイアウト会議
〔平成12年8月4日：日本アニメーション(株)多摩スタジオにて〕
〔左〕作画：北原健雄氏 〔右〕監督：楠葉宏三氏



【絵A：色鉛筆画】



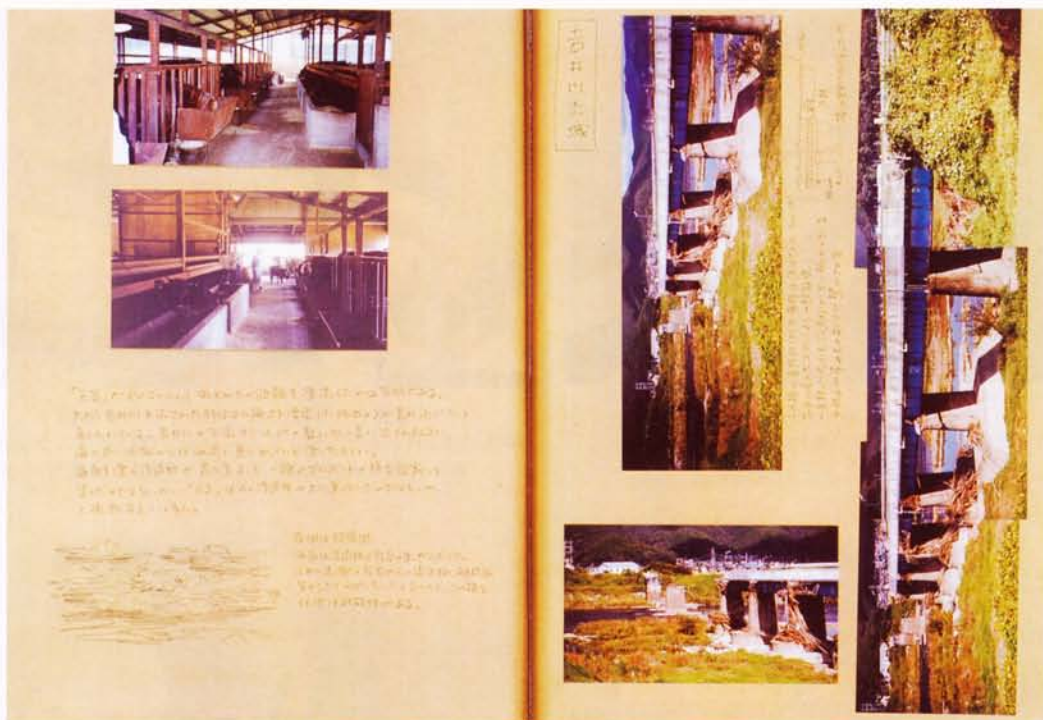
【絵B：クレパス画】



【絵C：水彩画】



【ラフスケッチ】



資料4 楠葉氏による現地取材スクラップブック〔平成11年10月17・18日取材〕



資料5 瀬戸内海から望んだ黄島周辺の風景〔(上)写真、(下)絵p. 26～27〕

の未公開の絵とラフスケッチを紹介する。

【絵A：色鉛筆画】：子牛が黄島へ漂着した場面である。実際の絵本は、「子牛はしっかりと きしべの岩を ふみしめました。」をイメージする絵に描き変えられており、この絵柄は登場しない。

この絵は本研究会のスタッフが初めて絵本の絵柄として手にしたもの一つであり、絵本化への夢が大きく膨らんだ印象深い絵でもあった。

【絵B：クレパス画】：絵柄のイメージを模索する中で描かれた1枚である。幼児向けの可愛らしい雰囲気表現しようとしたものである。

【絵C：水彩画】：牧場での「人」と「牛たち」の様子を描いたものである。その後、ストーリーが牛たちだけの心情の交わりで展開される¹³⁾ ことになり、実際の絵本ではこのように「人」を描き込んだ絵柄はない。そういった意味においても、貴重なサンプル画である。

【ラフスケッチ】：完成絵本6～7ページ全面に描かれた嵐の前の不安な情景のラフスケッチである。石岡牧場周辺の小高い丘から吉井川を望んだ風景が、忠実に描かれようとしている。

実際に基づいた風景

絵本の風景は、楠葉氏による現地取材のスクラップブック（資料4）—写真やラフスケッチを交え、詳細な書き込みがなされている—をもとに描かれている。資料5を見ていただきたい。これは、「絵本」の見開きページ¹⁴⁾と「瀬戸内海から望んだ黄島周辺の風景」である。見開きページの全景が、牛窓・前島・黄島の風景そのままであることがおわかりいただけるであろうか。このように絵本の絵柄は、実際の風景に基づいて、川の流れていく方向、風の吹いてくる方向など、各ページによって矛盾が起こらないよう、細やかな配慮の行き届いた作品となっているのである。

まとめ—絵本の配布と絵本化事業の構造

津山市の平成12年度事業として完成した絵本は、台風10号災害からちょうど2年目にあたる平成12年10月

表4 絵本『きせきの子牛』配布概要

地域	施設等	施設数	配布冊数	合計
津山市	保育園	23	6人に1冊	250
	幼稚園	15	6人に1冊	190
	小学校	19	45	855
	市立図書館	1	20	20
	キリスト図書館	1	5	5
	さんさん	1	1	1
	児童館	1	5	5
美作5郡	公民館	16	1	16
	教育委員会	29	1	29
	保育園	58	2	116
	幼稚園	36	2	72
	小学校	73	2	146
	図書館	7	3	21
	誕生寺養護学校	1	2	2
県内	市町村教育委員会	47	1	47
	図書館	36	3	108
	県教育委員会	1	1	1
	津山教育事務所	1	1	1
絵本制作関係者など				93

18日、津山市および美作5郡—久米郡・苫田郡・勝田郡・英田郡・真庭郡—の保育園・幼稚園・小学校・図書館・教育委員会等へ配布された（全配布数：1,978冊、表4参照）。津山市内の学校等への配布基準は、「保育園・幼稚園」に関しては園児6人あたり1冊、「小学校」については教材として活用することを考慮し、1校あたり45冊とされた。

この後、平成12年12月、建設省岡山河川工事事務所および岡山県土木部河川課の協力を経て、上記の地域を除く県内の全小学校等（445箇所）へも1冊ずつ絵本を配布できる運びとなった。

一般市販に関しては、(株)ぎょうせいの各地域の駐在員による販売のほか、子牛“元気くん”の寄贈された農業公園：OFMノースヴィレッジにても販売する形態をとっている。

これまで報告してきた『きせきの子牛』絵本化事業の全体構造を図式化すると、図2のようになろうか。この事業のあらましを一握りいただけるものと思う。

出版1年後の10月1日現在、初版4,000冊（津山市事業分2,000冊を含む）、再版1,000冊、第3版1,000冊と版を重ね、累計印刷部数6,000冊はほぼ完売状態である

という。その評判を耳にすることもありますが、絵本『きせきの子牛』に関する一般的な評価や意義等に関する調査・分析については、後報で論じたいと思う。

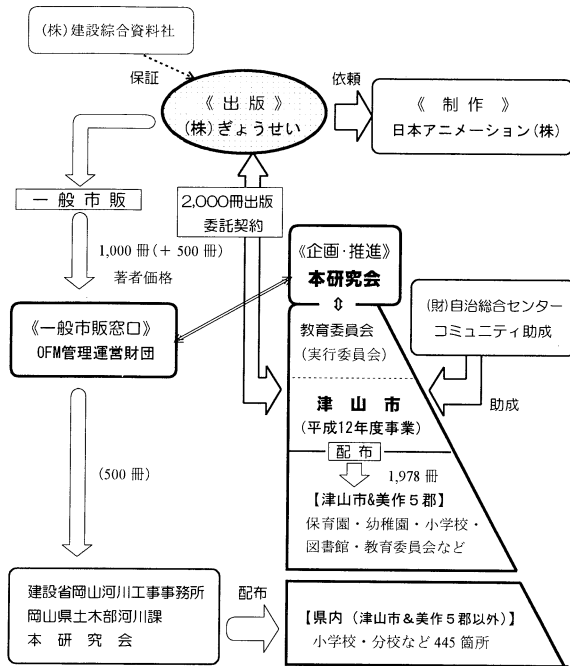


図2 絵本の企画・制作・出版・配布に関する全体構図

註および参考文献

- 1) 福田恵子：「きせきの子牛“元気くん”を活かした地域づくり研究会」に関する活動報告（第1報）—研究会結成までの経緯と活動の概要について—、美作女子大学・美作女子大学短期大学部紀要，第46号，94 - 104（2001）
- 2) 中央教育審議会「幼児期からの心の教育の在り方について」答申，平成10年6月30日
- 3) 助成対象事業者は，①市町村，②地区住民のコミュニティ組織，③自主防災組織のいずれかとされている。この事業に関しては，①ないし②が考えられたが，企画の経緯や遂行上の自由度を勘案した場合，②が最も望ましいと思われた。
- 4) 日本アニメーション(株)は，昭和50年会社創立後，「フランダースの犬」をはじめとして，「母をたずねて三千里」「あらいぐまラスカル」「赤毛のアン」等，数々の名作アニメーションを制作し続けてきた。現在，「ちびま

る子ちゃん」等を放映中である。

- 5) その背後には，「絵本原稿をもって出版社に企画を持ち込む」という腹案があり，日本アニメーション(株)としての自信をうかがうことができた。
- 6) 楠葉氏の意向によるもの。構成案は小山真弓氏。
- 7) 日本アニメーション編著，絵本『きせきの子牛』，ぎょうせい，p.20（2000）
- 8) 同上，p.23
- 9) 佐々木宏子：読みの発達—絵本の読み聞かせを通して—，教育と医学，第45巻第1号，慶應義塾大学出版会，p.10 - 16（1997）
- 10) 福田恵子・中西 淑：子どもの読書と心の育ち，平成12年度文部省（文部科学省）委嘱事業：子どもの心を育てる読書活動推進事業調査研究報告書，津山市子ども読書推進事業実行委員会，p.79 - 100（2001）
- 11) 日本アニメーション編著，絵本『きせきの子牛』，ぎょうせい，p.12（2000）
- 12) 北原健雄氏略歴：昭和17年長崎県平戸市に生まれる。「ルパン3世」「シティハンター」等の作画監督を経て，現在，日本アニメーション(株)にて若手の指導にあたっている。
- 13) “人物が登場することによって，子どもたちの牛への感情移入が弱められる”という，子ども向けアニメーションに長年携わっている楠葉・北原両氏の専門的・経験的な意図によるもの。同時に，“人物と牛との言葉を使い分けることの難しさ”もあった。
- 14) 日本アニメーション編著，絵本『きせきの子牛』，ぎょうせい，p.26 - 27（2000）

謝 辞

絵本『きせきの子牛』は，多くの方々の惜しみないご支援の中から生まれました。“地域への貢献と感動的なすばらしい実話のために”と当初よりご協力下さいました日本アニメーション(株)の佐野浩平氏と佐藤昭司氏，絵本出版の実現に向けて常に励まし続けて下さいました楠葉宏三氏，全身全霊を込めて絵を描いて下さいました北原健雄氏，また絵本の校正等について多々ご無理を聞いて下さいました谷下満浩氏，絵本化実現に向けて頼もしいリーダーシップを発揮して下さいました目瀬守男学長と寺内侃一氏（前OFM管理運営財団事務局長），予算および助成金の申請や契約など多くの難しい課題をこなして下さいました津山市教育委員会の皆様，そして私たちの活動を陰ながらご支援下さいました野平匡邦氏に心よりお礼を申し上げます。

（2001年12月1日 受理）